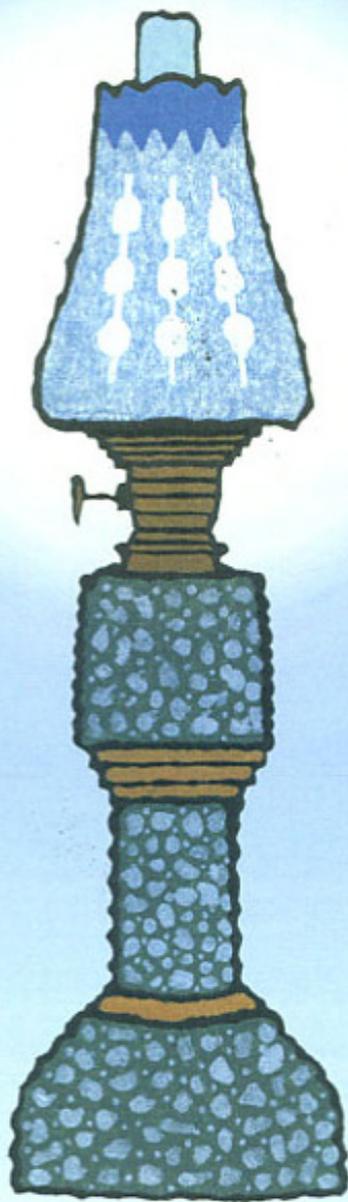


春燈

8 月号

August 2011



主宰の句

安立公彦

麦秋やどの家も昼のしづけさに

夏つばめ刻を自在に晶子の忌

伊賀甲賀風をひとつに芒種かな
(関西大会二句)

一掬の清水やわれも旅人なる

あぢさゐりに喪ごころ重き朝かな
(悼・禾汀さん)



久保田万太郎の句

ひぐらしに十七年の月日かな

『草の丈』昭和二十七年

前書に「ひさぐに河童忌に出席」とある。さすが即吟、挨拶句の名手の句だ。「ひぐらし」の鳴き声と「十七年の月日」を、助詞「に」によって結んだだけの誠に簡潔なところがよく、仮に「に」が「の」だったらと考えると、この「に」一音の機能の高さに驚かされるのである。詠嘆の切字「かな」の働きがまた絶好だ。

悼句（芥川龍之介佛大暑かな）とともに忘れ難い。

上山 永晃

久保田万太郎の句

つけてやりし鈴ふりならす子猫かな

『流寓抄』昭和三十年

私は無論、師にお会いしたことはない。ご自身「流寓の人生」と呼ばれた境遇のためか、春燈六十周年の記念号の幾枚かの写真に、ほぼ笑顔はない。しかしこの句に触れた瞬間、小説家・劇作家の貌ではなく、子猫の前に微笑む師の姿が想起され、心温まる一句である。猫に、人生のささやかな至福を得られたのだろうか。

改めて万太郎師の奥深い抒情に魅せられた一句です。

宮 沢 治 子

燈下集

○ 西谷良樹

薔薇に朱のさしてわが道人の道
葉桜や音痴の抜くる路地の奥
行灯を背に人形や五月闇
片斜面広げて竹を植ゑにけり
病床に竹落葉聴く風の合

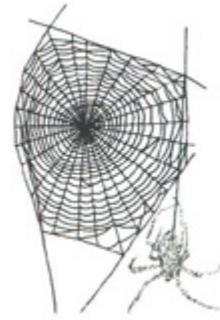
○ 綱 徳 女

香水や過去あきらかに立上る
薔薇の香やマイナス思考払拭す
糸とんぼ尾に恋情をみなぎらす
別れ来し胸にただよふ夜光虫
向日葵や青年神を畏れざる

○ 滝 沢 幸 助

母とわが誕生日同じ五月過ぐ
敗戦憲法以来五月を否みけり
飯豊連峰雪おごそかに五月尽
国会論争愚問愚答や花散り急ぐ
半盲の卒翁にやさし春の雨

○ 大 嶋 洋 子



ジャスミンの鉢植届く母の日や
新樹光ギプスの腕庇ひゆく
更衣身の衰へは止められず
佇むや夫の遺愛の薔薇ひらく
麦秋や雀の声に励まさる

○ 中村嵐楓子

傘雨忌の稽古早めにとりしかな

小満や葉を置きに富山より

しのび寄る闇を手なづけ山法師

最後の一周若楓目に灼きつけて

西瓜くふ三文と値のつく役者

○ 鷹崎由未子

伊賀めざす鉄路は青田あをたかな

青風や江戸向きて立つ芭蕉像

ブラスバンドの水面にひびく城若葉

夏の炉の灰美しき蓑虫庵

水鶏笛たはむれに吹きよき日なり

○ 小張昭一

青林檎がぶりとサトーハチロー忌

母の日や吾には母のやうな妻

芭蕉生家灰ならしする夏火鉢

卯の花や江戸の五不動六地蔵

就活の子に内定来梅雨晴間

○ 鈴木鳳来

酒蔵のもろみ呟く立夏かな

若鮎や美濃も奥なる長良川

傘雨忌や左ぎつちよの招き猫

あけぼのの峡の静寂や桐の花

薫風や明治が遺す製糸場

○ 松本峰春

退院を明日に二声ほととぎす

赤き薔薇へ脇目も振らず退院す

退院の緑さす道花道めく

薫風へ姿勢正して退院す

よろぼうて帰る退院道は首夏

○ (故) 中野英伴

蛭の火絶えなば死の闇呼びにくる

牡丹いま弱みは見せず崩る闇

夏めくや肌みするともなくあらは

闇に脱ぐ衣の苦しみこそ蛇

恋に負け火を失ひし蛭の死

当月集

安立 公彦選



○ 西岡啓子

ふる里を離るる車窓桐の花
父の日の空いくたびも仰ぎけり
昼顔や空にとけこむ海の色
水無月の人づてに知る話かな
夕涼や空仰ぐことならひとし

○ 河崎國代

神境に神住む木霊ほととぎす（高千穂）
こそばゆき結びの恋や麦の秋
思ひ切り胸襟開く夏越かな
蟻の道掛け声もせて餌を運ぶ
雨いとど犬脅え鳴く夏の闇

○ 茂木なつ

堰いくつ越えきて今日の代田水
上蔭の糸吐くりズム夢の中
見まい聞くまい何かきこゆる麦の秋
存ふる大正生れ一夜酒
自己嫌悪さらつてくるる梅雨の月

○ 齋藤晴夫

頂の雲のさわぎや遅桜
上善如水風なく花の散りゆくも
里山の爽立つみどり仏生会
千年の武蔵の棚田畦を塗る
人もまた自づと老いて竹の秋

○ 藤丸誠旨

髪切つて涼しき風の車椅子
二の腕のさびしかりけり更衣
六月の空白し雨生まれけり
うすれゆく恋の発端梅雨入かな
うつつなき呆け心や合歡の花

春燈の句

安立 公彦選

万緑の中や真紅の一両車

福島 室井津与志

十年を医聖に頼り夏の天

仙人掌の花惜し気なくもらひ受く
花ざくろいつの間にやら五つ六つ

竜巻の報せ呼びたるはたた神

紫陽花の垣根の先の祖母の家

酷暑とて北も南もなき世かな

看板の鮮やかに夏来る

菖蒲湯に肩まで浸る朝かな

東京 池田 節

若き日の兄の草笛夢に聴く

かき氷音立て食ふる親子かな
水中花かすかな揺れを伝へけり

雛罌粟のさやかな音を聴きにけり

初夏の風やはらかな野辺送り
せはしなく差す口紅も夏のいろ

卯の花の香に惑はされ辻違ふ

燕すくなき空のさびしさ言ひあへり

夏下駄の快音待つや師の快気(西谷良樹様)

東京 大西由美子

薰衣香女性専用車両かな

ふたり暮しに余る路煮て母遠し

薔薇園の百万本に惑ひけり

菖蒲田の紫占めて風さわぐ

掌に残るぬくもり恋蛭

山法師の花白々と明け初むる

誘はれて若竹を見に立ち去れず

埼玉 原田たづゑ

空と屋根青と赤なり五月来る

思ひ出の磁器の白さや新茶の香
ジャスミンの花盛り上がり香りけり

広島 川崎 雅子

埼玉 中里よし子

東京 横山さくら



余言

安立公彦

作者は関西大会の主催者。準備万端調った大会だった。「過客」はもとより、「ほそ道」の冒頭の一節、「月日は百代の過客にして」からの本歌取。芭蕉生家の長い土間を歩いてみると、時空を超越した「過客」の思いが湧く。また町なかには歴史を感じる大樹が聳え、その木影はまさに「伊賀の緑陰大いなる」そのものだった。いい会だった。

ひたひたと寄る年波の藍ちぢみ

片桐てい女

清和なる木の香水の香伊賀上野

上山 永晃

「ひたひた」という疊語が、みごと誉め果を以て、「寄る年波」を受けている。「ひたひたと寄る年波の」と、静かに誦していると、改めて「己の来し方を振り返る思いがして、しばしその思いの内に身を置く一方、「ひたひた」にこめられた現実直視の確かな思いを併せて感じる。

結句の「藍ちぢみ」が新鮮だ。この五音が付くことで、一句は己の年波への思いから、夏の到来という季節への挨拶として、大きく更に若々しく羽撃くのだ。

過客われに伊賀の緑陰大いなる

西川 保子

一つ葉や踏みてたどる句碑の文字

佐藤 信子

五月二十五、二十六日の両日、春燈関西大会が伊賀上野で催された。伊賀上野は芭蕉の故郷であり、その生家や記念館、更に蓑虫庵など、俳人には必見の地である。

この句も関西大会の作品。蓑虫庵での句。広い敷地の中に、蓑虫庵や芭蕉堂が床しく建ち、幾つかの句碑が昔を語るかのように、静かに佇んでいた。

敷地の一角に古池塚があった。古池や蛙飛こむ水のを

と。余りにも有名な一句。句碑の上部に円窓があり、蕉風開眼を現すものという。跳ぶ蛙を浮彫りにした碑は、若むして肝心の句碑の字が読み辛い。まさに「眺みてたどる」だ。「二つ葉」が古典的雰囲気とよく調和している。

伊賀越えの夕日見てゐるサングラス 三上 程子

関西大会で特選に頂いた一句。「夕日見てゐるサングラス」が全てを表現している。このサングラスの女性は、作者と取つてもいいが、作者の創作眼を通して存在する一人の女性と見ると、その対象が極立つて写し出されてくる。

めぐり来る施設ぐらしや梅雨みたび (他) 小島 禾汀

六月五日早暁、小島禾汀さんが亡くなった。八月生れの禾汀さんにとつて、八十二歳を目前の死だった。三月二十日に松本俊介さんを失い、三か月経たない間の禾汀さんの訃報である。心に重く伸しかなかった。

八月号の禾汀さんの句は、川崎の高嶽良子さん経由で、六月早々に届いた。句稿に、ペンを走らせる気力も失せているということだった。この句には禾汀さんの深い思いが、淡々と表現されている。「梅雨みたび」が悲しみを誘う。

禾汀さんとの交友も長い。九日の通夜から帰った夜、合同句集『桃青』を開いた。半世紀近いむかしの、若かった七人の顔が浮かぶ。今は御霊安かれと祈るばかりだ。

螢の火絶えなば死の闇呼びにくる (他) 中野 英伴

六月十六日の夜、中野英伴さんの逝去を知った。小島禾汀さんの逝去からわずか十日のあとに、英伴さんも逝かれるなど思つてもみないことだった。

一か月前、英伴さんから手紙を頂いた。便箋をはみ出さんばかりの力強い筆跡を見ていると、お元氣な頃の英伴さんを目の当りにするようだった。ただ文面は厳しかった。五月七日退院とあり、「今度悪くなったときは覚悟している」、また「そんな遠くない先に死ぬなど自分では思えない」とも書いてあった。英伴さんは五月十七日に再入院、今度はホスピス病棟だった。八月号の投句も自身の筆跡だった。夜更けて窓外の螢火に見入る作者のお気持ちを思うと、言葉もない。六枚に及ぶ手紙を読み返し、その中の、「俳句つて実に深いものだ。やればやる程、その魔力の恐ろしさに魅了される」という文面に、英伴さんの覚悟と悟りを併せ知る思いだった。ひたすら御霊安かれと祈るのみ。

一門に学び来し日々風薫る 大室重美子

五月本部句会で特々選に頂いた一句。「一門に学び来し日々」という謙讓な思いと、その鄭重なしかし前向きな姿勢が遍く表現されている。その姿勢は作者の句のころを大きく豊かにするだろう。「風薫る」も効果的である。